

り、これはむしろ正常星雲の場合に近い。

電波星雲の白鳥座Aについては上記のように宮本教授が(B)の可能性を述べているが、禁制線の電離段階が、[OI]から[NeV]に及び、単純な衝突スペクトルでは説明できないことを示している。

電離段階の幅は多かれ少なかれどの星雲核にもみられる。(A)の立場ならば、星からの距離による成層化などが考えられるし、一方、(B)の立場ならば、電離ガスの雲同士の衝突などによる衝撃波スペクトルなどが考えられる。星間雲における衝撃波スペクトルの計算はすでにピッケルナー(1954)がいくつかの例について行っている。いずれにしても、(A)か(B)かの選択が先決であるが、その上で、衝撃波スペクトルの必要性も生じてくるかもしれない。

引用文献

- 1) Ambartsumian, V. A. (1958) *Solvay Conference "On the evolution of galaxies"* p. 241
- 2) Baade, W., Minkowski, R. (1954) *Ap. J.* **119**, 215
- 3) Burbidge, E. M. and Burbidge, G. R. (1962) *Ap. J.* **135**, 694
- 4) Haro, G. (1956) *Bull. Obs. Tonanzintla* **14**, 8
- 5) Hiltner, W. and Iriarte, B. (1958a) *Ap. J.* **127**, 510.
- 6) " (1958b) *Ap. J.* **128**, 443.
- 7) Miyamoto, S. (1956) *Zs. f. Ap.* **38**, 245
- 8) Osterbrock, D. E. (1960) *Ap. J.* **132**, 325
- 9) Pikelner, S. B. (1954) *Izvestia Crimean Ap. Obs.*, **12**, 93
- 10) Rostovskaya, A. A. (1960) *Soviet A. J.* **4**, 418
- 11) Seyfert, C. K. (1943) *Ap. J.* **97**, 28
- 12) Spinrad, H. (1962) *Ap. J.* **135**, 715
- 13) Spitzer, L., Baade, W. (1951) *Ap. J.* **113**, 418
- 14) Vorontsov-Velyaminov (1958) *Memoires Liege* **XX**, 102
- 15) Woltjer, L. (1959) *Ap. J.* **130**, 38

研究室だより

東京天文台天体電波部

今を去る十年あまりの昔、武蔵の国なる御鷹野にいと珍らかなる精舎建立されぬ。そのさまは、世の常なる堂塔伽藍には似て、石の築地をきつき、その上に高さ二十丈余りなる銅の網をぞ張りたりける。是は天の声を聴かんぞと也。古の始皇の都咸陽宮にも似たる結構なりと噂する人多し。銀輪空に輝きし二基の塔、或は漢河の星を指し、或は日輪を追いて、人の眼をそばだてたり。

抑々御鷹野は、巴羅馬山、緑仁寺にも比すべき由ある靈城なれど、久しく修造なかりし上、兵火などにかゝりしかば、春は霞に立ちこめられ、秋は霧に交わり、扉は風に倒れて落葉の下に朽ち、甍は雨露に侵されて、聖壇更に顕なるさまなりき。前太政大臣萩原朝臣、信心ことに厚かりし人なれば、深くこれを憂ひ給ひ、如何にもして修造せんといふ大願を立てらる。すなはち莊園を寄進して、堂舎塔廟規矩正しく修復せられけり。上古にも末代にも有難かりし大臣かなと時の人感じ合はれける。

その比、異朝より天の声を聴き民に至福を至すの法伝へられしかば、分光院座主熊野僧正新たに戒を受け、秘法一つとして残る所なく修せられけり。その法を広め、三界六道の衆生を済度せんとて営まれたる精舎これなり。僧正は衆徒を育む志深く、頓悟の誉高き善知識なれば、学僧衆多欽集し、読経の雅声絶ゆることなし。

さる程に、隙ゆく駒の足疾く、春の草暮れて秋の風に驚き、秋の風やんで春の草になれり。送り迎へて十年をすぎると、桑田変じて滄海となるためしにもれず、京里を離れて無人声、晴風梢を鳴らして夕陽の影静かなりし御鷹野にも、都塵次第にしのびより、かまびすしきこと

都大路と変らざるさまとなれり。も早天の声も聴くこと能はず。こゝにありて僧正、人里遠うして囂塵なく、地形すくれたる地を撰び、等妙覚王の靈場を立てんと志し給ふ。すぎにし治承の比はひ、平相国浄海入道と云へる人、京師は南都北嶺に近くして、いささかの事にも春日の神木・日吉の神輿など云ひて乱りがはしきをいとひ、山隔たり江重ねたる福原に都遷りの儀計らひ出されたる故事にならひしことならん。弟子に命じて、北は蝦夷の果より南は九国に至るまで、日本秋津洲のくまなく地を探索せたり。

或は野原の露に宿をかり、或は高峯の苔に旅寝し、山を越え河を重ね、粟散辺地の境を尋ぬれども、なかなか格好の地見付からず、幽閑の境と聞きし所も、ゆいてみれば、雲井を照す雷の常に鳴下り、麓に雨しげくして一日片時人の命の絶えてあるべきやうもなし。地相すくれたると見し所も、賤が山田をかえさねば米穀の類もなく、菌の桑をとらざれば絹帛の類をうべきすべもなし。しかれども櫛風沐雨の効ありて、みこもかる信濃の園なる八が峯の麓に、程よき地見出されぬ。此所は帝城を去りて二百里、青山峨々としてまはりめぐるし、松吹く風索々たり。花は林霧の底にほころび、月は清明の光を争ひて、誠に心も澄みぬべし。

僧正いたく喜び“一院建立成就して、都鄙遠近隣民親疎、堯舜無為の化をうたひ、椿葉再会の笑を開かん”と勸進の趣をさゝげて、十方檀那を勧めありきける。されど、めでたかりつる精舎をば他国他所に移し、講堂僧房経蔵新たに造り出されんこと、如何が国の費民の煩ひなかるべき。あまつさへ本此所に栖む人は、地を失はんことを愁へ土木の煩ひを歎きあへり。僧正の所願が成就いと難きことかなとぞ人申しける。仰ぎ願はくは神明仏陀、僧正が無二の丹誠に照して唯一の玄応をたれ、随妄の雲を払つて仏法繁昌鎮護国家の本懐をとげしめ給へ。